

養護系施設での実習を通じた、学生の意識変化に関する一考察

～学生インタビュー調査を通して考える～

A study on changes in attitudes of students Practice in institutional care.

- From the results of student interviews -

中島 健一郎

Ken' ichiro NAKASHIMA

1. はじめに

長崎短期大学（以下、本学）保育学科（以下、本学科）では、保育士資格取得に掛かる実習ⁱについて、1年次後期に施設実習10日間、2年次に保育実習（保育所のみ20日間、または保育所10日間と施設10日間）を実施している。この他、学生の多くが幼稚園教育実習にも参加することを考えると、実習は合わせて2か月余りに及び、本学科課程の重要な位置を占めていると言える。しかし、入学当初のアンケートⁱⁱによれば、本学科学生の多くは保育所または幼稚園への就職を目指しており、多くの学生にとって、施設への就職は、選択肢にすら入っていない。また、資格取得要件について、「（保育所の）保育士になるために、施設での実習が必要だとは知らなかった」という声も毎年聞かれる。

そのような状況下、実習の中でも施設実習を最初に、それも1年次後期という時期に実施することについて、筆者は検討の必要性を感じてきた。学生の多くが保育所保育士や幼稚園教諭を志している以上、当該施設で関わる子どもたち（いわゆる乳幼児）を対象とした実習こそ、優先して実施されるべきと考えてきたからである。

しかし一方で、施設実習を経験した直後の学生を見ると、施設に対する偏見や誤った知識が実習において修正され、進路選択の一助になっているのも、また事実である。そのよ

うに考えるならば、現在の実習体制には、「早期に学生の進路選択の幅を広げる」という効果が期待でき、それは2年次以降の勉学に対する取り組み向上に資すると考えられる。

ところで、本学の施設実習では、乳児院や児童養護施設など、社会的養護の領域にある施設（以下、養護系施設）と、知的障害者入所更生施設や身体障害児施設など、障害児者福祉の領域にある施設（以下、障害系施設）のいずれかでの実習を経験することとなる。しかし、こと養護系施設について言えば、入所児童の抱える問題が極めてセンシティブである等の事情から、学生がボランティア活動等、実習以外において、その中身について深く知る機会に乏しく、知識不足・経験不足による偏見や誤解の助長も懸念される。

そこで、1年次後期の施設実習において「養護系施設」を選択した学生を対象にインタビュー調査を実施し、学生の意識変化を把握するとともに、今後の実習体制について一定の考察を加えることを目的に、研究を実施した。

2. 研究の目的および方法

先にも述べたが、保育実習（保育所実習）と比べ、施設実習の認知度は低く、「必要な情報や知識が十分伝達されることなく、実習を経験することが多いと考えられるⁱⁱⁱ」。そのため、本来であれば入学直後から、施設実習に向け

での継続的な学びが開始されるべきところであるが、施設実習に向けての実習指導は、1年次後期の半年間で、クラス別隔週実施（全8回）という少ない授業時間数で展開されている。学生に施設実習の概要を理解させ、加えて、実習生としての基本的心構えや、すべての実習に共通する児童福祉の基礎知識等の確認を行うには、不十分と言わざるを得ない。

また、学生自身が、実習全体における施設実習の位置づけをどのように理解しているかも重要である。施設実習が終了した段階では、極言すれば、学生にとっては、自身が経験した施設実習が「実習のすべて」である。このことから、学生が実習の全体像を捉え、かつ、実習全体における施設実習の位置づけもある程度理解できた時期で、学生の意識変化について把握することに価値があると考えた。

このような知見等を踏まえ、本学学生の実習における意識変化について明らかにし、もって、今後の実習全般の質向上を図ることを目的に、学生を対象としたグループインタビュー調査（以下、インタビュー調査）を実施した。なお、インタビュー調査の実施にあたっては、その参考とするため、筆者の児童養護施設勤務時代の同僚や、児童養護を専門とする研究者で過去に児童養護施設での勤務経験を持つ者3名から意見聴取を行い、インタビュー調査の柱を作成した。

インタビュー調査にあたっては、本学2年生を対象に、研究内容、目的、参加および途中棄権の自由、研究における倫理的配慮等について説明した上で、協力者を募集した。その結果、17名の学生から研究協力の申出があった。さらに、インタビュー実施のため日程調整を行ったところ、最終的に10名の学生が研究協力者として確定し、2011年2月に、A班（6名）、B班（4名）の2グループに分け、インタビュー調査を実施した。形式は半構造化面接で行い、インタビュー内容について、筆者が逐語録を作成、KJ法による内容分析を行っ

た。

なお、研究協力の条件として、研究協力者の性別および氏名は匿名で取り扱うこととした。そのため、インタビュー協力学生の特定を防ぐ観点から、インタビューの内容を歪めない範囲で、後段の文章には筆者が若干の修正を加えていることを申し添える。

3. 結果と考察

インタビューは、①養護系での実習を希望した理由、②施設実習で感じたこと（良かった経験、悪かった経験、等）、③実習の時期について（保育所実習等を含めた順序や、実習から次の実習までの間隔等）、④その他、の4つの柱を立てて実施した。なお、各学生のコメントの中で、特徴的なものを表に示した。

①養護系での実習を希望した理由については、「養護系施設を知らなかったから（＝だから知りたかった）」という学生が10名中8名を占めた。残る2名は、短大入学以前に、児童養護施設に在所していた生徒と同級生であった経験等から、児童養護施設についてはおおよそ理解していたとのことで、さらに深く学びたいという意識から、希望したとのことであった。8名について詳しく理由を聞いたところ、障害系施設も当初考えはしたが、「何だか“かわいそう”って思ってしまう気がして..」という意見や、「授業で児童養護施設A園のVTRを見てから..」といった意見が聞かれ、各学生が養護系施設での実習を希望するにあたり、そのルートは様々であることが示唆された（表1）。

No.	希望理由（逐語録より）
1	初めての实習なので、一番（家の）近くなことと、泊まりでずっと行けることと、全然（児童養護施設について）知らないで..

2	勉強してるうちに興味を持ったのと、あと障害系は、なんだか“かわいそう”って思ってしまうような..
3	障害系は頭になかったです。授業で聞いて、「これは（実習に行くなら）養護系だな」と..
4	たまたまネットで調べてたら、児童養護施設って保育士がいるんだって、知りました。で、自分の周りには施設の子とかいなくて（養護系施設のことを）知らなかったし..
5	障害系よりも、「養護系って小さい子とかいるけど、どうやってお世話とかしてるのかなあ」って思っ、知りたくて..
6	最初、養護学校とかと思ってたし、（養護系施設の）名前を聞いてもピンと来なかったから、勉強してみたいなあと思って..
7	短大に入るまでは（養護系施設を）知らなかったの、（短大に）入って勉強してから、実際に見てみたいなあって..
8	本当は（養護系施設の中でも）乳児院がよかったけど、通う距離の関係で無理って思っ、児童養護施設に..
9	高校の1つ上の先輩が（児童養護）施設にいて、それで興味があつたし..
10	私たちと同じくらいの（年齢の）子どもがいるとか聞いて、それで、どんな生活してるのかなあって思っ..

表1：養護系施設を希望した理由

②施設実習で感じたことについては、「施設の養護・養育方針についての驚き」や、「(予想外の)子どもの反応」について、意見が聞かれた。

前者（表2：1～3）について、本学の実習施設の多くが大舎制であることもあり、子ども達は、集団生活の中で、一定の役割を担っていることが多い。しかし一方、近年の学生は、以前と比べて、家の手伝い等の役割を担う機会が少なくなっていることから、自身の生活と対比させる中で、養護系施設での生活を、驚きを持って受け止めたようである。

また後者（表2：4～7）について、子どもが予想を超える「深い話」をしてきた際、どのように対応すればよいのか腐心している学生の姿が伺える。学生なりに、子ども達の抱えている生育歴や背景、課題に気付いているからこそ、「(極めて重要な問題故に) 軽々に答えを返せない」という辛さと、「(だからこそ) 適切な答えを返してあげたい」という相克に苦しんでいると思われる。

No.	実習で感じたこと（同上）
1	自立支援って言って、何でも、子どもに職員がさせていること（に驚きました）。幼稚園児でお布団出したりとか。部活帰りで疲れているのに、食器を自分で洗ったりとか。全部が全部、当番制。でも、子どもたちも気づいているっぽい。「こんなの普通の家ですか?」って、高2の子から聞かれたりしたし..
2	自分の家は、ほとんど親にしてもらっていたから、子どもたちがある程度自分でやるようになったら、それからさせればいいと思う。自分も高校生になるまで、お風呂洗ったこととかなかったし。洗濯物もそれまで全然だったし、お米研いだこともなかったし。自分がしたいなと思った時にする、それが一番、「家っぽい」かなって..
3	ある程度年齢が高い子は自分でしてもらうのもいいと思うけど、幼稚園とかだと、自分は（布団上げ下ろしとか）してなかったから、してあげてもいいのかなあと。
4	小学校1年生の児童、おんぶをすごくせがんできたんです。かなり体力的にもきつかったけど、あるとき、その様子を見ていた職員が、私におんぶされるその子に向かって、「よかったね～甘えよるね～」と言ったのを聞いて、「ああ、これは甘えなんだ!」って気付いて、子どもが甘えてくる時、その気持ちを受け止めなければということとは勉強はしていたけど、それを実際の場面で気づくことが出来たなあって...
5	自分のこととか、あまり話さないのかなと思ってたけれど、自分からぼんぼん話してくれたし、「うちのお母さんはね..」とか、「うち、お父さんおらんちゃんね..」とか。

6	中2くらいの、自分の担当じゃない子が(中略)、その子の家族が泊まりに来る日があった。実習生部屋の隣で、3日くらい過ごしてて、私が声を掛けたら、「今、親がきとるっちゃんね～」とか言っていたので、「少しくらいしゃべってみたら？」とか言ったら、「いや、無理無理無理..」とか言ってきて、自分も下手なことはいえないから、「そっか」と話を聞いておくことしかできなかった。親に対して否定的な感じだったので、どう関わったらよかったのか、結局答えは出なかったです。
7	小学校1年生の授業参観に一緒に行ったんですけど、ドッジボールを一緒にしたんだけど、みんな保護者が来ているけれども、私が行ったことについて、園の子どもはどう思っているのかな..と思った。

表2：実習で感じたこと

③実習の時期については、「施設実習をどの時期で実施するか」という問題と、「幼稚園、保育所、施設の3実習のバランス」という2点について、意見が聞かれた。

冒頭にも述べた通り、現在、施設実習は1年生の年度末(2～3月)に実施されており、学生は初めての实習として、それを経験する。しかし、施設実習の時期として、「もう少し遅い方がいい(表3:6)」という意見や、実習全体の開始時期を早くすべき(表3:1,2,3,5)という意見が聞かれ、各実習の時期、実習の順序等について、改善の必要性があることが示唆された。特に、実習に臨むにあたって、「最低限の知識を習得してから」という点で、少なくとも前期修了し、その上で、なるべく早い時期に最初の実習が開始されることを希望する意見が出された(表3:9,10)。また、実習の時期ではなく、「実習メンバーが決定する時期」次第で、実習における緊張感に差が生じる可能性も指摘された(表3:7)。この点は、実習事前指導の構成においても、再検討の必要性があると考えられる。

No.	実習時期(同上)
1	もうちょっと1年生の早い時期から、実習が始まってもいいかも。(中略)2年生の最後にはばっと詰まっている感じだから、もう少し間を開けたり(中略)、1年の前期が終わる頃に、保育所でも施設でもいいから経験しておきたい。
2	就職も、実習も、同じ時期にバタバタと始まってしまうから、もう少し早い方が..
3	もうちょっと1年生の頃に実習を経験していたら、実習で「ああ足りなかったなあ」と思ったところを、後から学習で深めることが出来たと思う。1年生の頃は勉強勉強..が多かったので、いざ実習になってみて、「ああこれが大切だったんだ」って気づいたし、実習の後に「深める時間」や「学習する時間」があったら、もっといいかなあ..って
4	保育所から幼稚園実習へ移るところが、詰まりすぎて、準備もできないし、気持ちの切り替えもできないまま、なんとなく突入してしまうっていうか。幼稚園(実習)が同じ幼稚園に2回行く人だったらいいだろうけど、別の園に行く人は、オリエンテーションや準備や、いろいろ大変だっただろうと思うし..
5	幼保をもっと早くして欲しいかな。ばたばたしてる感じ。幼の実習が終わってしまったらもう冬になる。保育所も、夏休みをつぶしてしまうから、もう少し分けてあると..。幼稚園は分けてあるから、前の実習の時のことを生かして、「今度はこうしていこう」と考えられるけど、それができないとねえ。(中略)施設実習の時は、実習というものが想像付かなかったし..
6	(施設実習は)2年の6月終わりとか、もっと後ろの方がいい。なんか結局わからないまま、勉強不足っていうか、勉強できるわけがないまま、行ってしまった感じがする。「試し行動があるから」と言われても、「試し行動ってなんですか?」ってレベルだから、もっとイメージが付きやすい幼稚園とか保育園を3月とか2月に入れるんだったら、もっとイメージ付きやすいだろうし、自分が小さいとき通ってた時のことからイメージ付きやすいだろうし..

7	私は一緒に行った人が他のクラスで、全く知らない人ばかりで、10日間一緒のところに寝泊まりして、一緒に寝る人も全く知らない人だったから、実習プラスの緊張感がありました。だからもっと早くから、「誰と一緒に」とか知りたかった。名前すら知らなかったんで、誰に話しかければいいかも分からなかった。
8	2年の6月頃とか、2年の最初とかに施設を入れるとかは？保育所を1年の12月とか。 1年の始め頃に保育所とか幼稚園とかに行ってもいいかもしれない。楽しいだろうし、それから帰ってきて勉強して「ああ、こういうことだったのか」って分かるから。
9	実習に行くとしても、知識が無い状態で行っても何にもならないから、終わらせておいた方がいいと思ったんです。だから、実習に行くにしても夏休み終わりとか、後期入ってからとか..
10	あんまり何も知らない状態で行ったとしたら、少し勉強していった状態でさ忙しいと思ったから、「うわー保育士ってこんなに忙しいんだ」とか思いそう。やめようとか。面喰らってしまうというか。

表3：実習の時期

④その他、これまでの範疇に入らない意見としては、以下のようなものが出された。

施設実習における心構えや、子どもへの具体的な援助方法（表4：1.2）については、学生個々人が体験した、子どもとの出来事や、それに伴い施設側から受けた指導を反映していると思われる。養護系施設は生活施設であるため、職員や実習生は、どのようなタイミングで、子どもの問題に直面させられるか、予想が付きにくい部分がある。そのため、普段から、専門職としての問題意識を持ちつつ、援助における姿勢を確立しておく必要性が示唆された。

実習事前指導の中身（表4：3～6）については、養護系施設は、その中身を普段の生活で見聞きする機会に乏しい。そのため、実践経験のある教員の体験談等はもちろんだが、

映像教材によって、可能な限り「施設の生の姿」を学生に伝えることが必要と考えられる。また、これは施設実習よりも、幼保実習を含む実習全体に対しての指摘であるが、指導案や日案、実習日誌の記述方法について、単一の方法ではなく、多様な施設の具体例を紹介し、指導して欲しいという意見が聞かれた。

No.	その他（同上）
1	施設実習は、子ども一人一人と関わるのが、軽い、うわべだけの気持ちじゃなくて、真剣に深く関わることができそうかな。 その場を一緒に過ごしていればいいや、というのではなくて、「何でその子はこうしているのか？」って考えるし..
2	子どもを、一人の人間として見ること、ただかわいいという存在では無く、性格や環境もいろいろあるし、そういうのを見て、見るだけじゃなくて、どれくらい自分が関わることができるかを...
3	事前学習の時に、できれば映像があった方がわかりやすいと思うんです。情短のドキュメントを先生の授業で見て、それで様子とか分かったんですよ。できれば、こういう施設はこうで..という映像がわかりやすいかな。「(実習に行く)その園」じゃなくてもいいから。
4	指導案とか日誌の書き方について、「こういう例もあるよ」というのを、たくさん知っておきたかったです。学校や施設、園によって、全然違うから。日誌を見せたときに、園の先生も「この書き方初めて見た」って戸惑われたから。で、書き方こうしようねとか、一緒に考えてやっていったから。
5	幼保の実習だと、(中略)短大で教えて貰った内容は、「(想定は)何歳児にして」という話ばかり入ってたけど、園の先生たちは、「何歳児かが大事なんじゃないって、ちゃんと内容に5領域が入ってるかどうか大事だから、そっちを意識して」と言われました。

6	<p>指針とか教育要領も、一応買ってはいるけど、授業の中でそれを開いてっていう機会はなく、2年後期の授業で触ったくらい。</p> <p>先生達の中には、学生が自分で指導要領とか開くっていう意図があったんだと思うんですけど、実際に施設に行く前に、それを自分でやってる学生が何人いたのかっていうと..</p> <p>日常生活で、教育要領を見るかって言われても、ちょっと..</p>
---	--

表4：その他

4. まとめにかえて

本稿では、養護系施設での実習を経験した学生のインタビューから、現時点での本学における実習の問題点、改善点を明らかにすることを目的としたが、わずか10名のインタビューにもかかわらず、様々な課題が示唆された。以下、筆者なりの考察と雑感を加えて、まとめに代えたい。

まず「施設実習の時期について」だが、前述の通り、本学の施設実習は1年次年度末に実施され、その事前指導は1年次後期から始まる。そのため、1年次後期には「(保育所や幼稚園等を含む)実習全体に関する指導」と、「(養護系・障害系の)施設実習に関する指導」の両方が含まれていなければならない。しかしながら、現状のカリキュラムは、「半期・隔週授業」となっている。これは2年次の「通年・毎週授業」と比べ、あまりに手薄であると言わざるを得ない。加えて、養護系施設での実習は、児童虐待や発達障害など、学生にとってショックの大きい課題に向き合うことも予想される。さらに、本稿の趣旨からは若干外れるが、障害系施設での実習に言及すれば、障害に対する正しい理解が、わずか半年間の学びだけで確立されているとも考えにくく、施設実習指導の中で、その不足を補うことは必要不可欠である。折しも2011年度より、保育士養成課程は新カリキュラムに移行することから、新カリキュラムでの状況も踏まえ、可能な限り

早期に、1年次の実習指導体制を強化する必要性があると考えられる。1年次後期からの「半期・隔週授業」は最低ラインであり、できれば1年次前期から、2年間の実習を見越した指導を開始すべきであろう。

次に、「各実習の組み合わせと時期」であるが、前述の施設実習指導の再検討を行う際、幼稚園および保育所の実習も含めた、実習日程の検討が急務と考えられる。幼稚園や保育所での実習は、学生自身が、幼稚園または保育所を自身の体験として知っていることがほとんどである。故に、実習のイメージも、施設実習のそれと比べれば、掴みやすい。そのため、例えば1年次後期に入り、保育専門職としての基礎科目履修が終わった段階で実習に出すことは、子どもとの基本的な関わり方を経験させることに、極めて有効と考えられる。現在は2年次に実施されている幼稚園実習を、1年次後期に前倒しすることも、一案であろう。

さらに、上記の実習時期の検討とも関係してくるが、「実習終了後の振り返りに、より時間を掛ける」ことも検討しなければなるまい。実習の時期が若干前倒しされ、また、実習の間隔が空けば、それぞれの実習後に、振り返りの時間を設けることが可能となる。また、学生の日誌や施設側からの評価等を活用し、実習事後指導を行うことで、学生の理解向上はもちろん、実習施設側の指導方針や、就職まで見据えた時、「どのような人材を欲しているか」を、本学で把握することにも繋がると考えられる。

現在の実習および実習指導体制は、実習を修了させるに止まり、実習の潜在的教育効果を引き出しきっているとは言いがたい。折しも保育士養成課程が新カリキュラムとなる新年度、これまでの本学の知見を踏まえ、実習における学びが、より深化されるよう期待したい。

最後に、本研究にご協力頂いた10名の研究

協力者の学生ならびに関係者に、心から感謝申し上げる。

ⁱ 保育士養成課程上は、保育実習Ⅰ～Ⅲまでの科目名称が与えられているが、本学では学生への説明等において、「施設実習」、「保育実習」の名称を用いているため、本講では便宜上、そちらを採用している。

ⁱⁱ 筆者担当科目「児童福祉Ⅰ」において、毎年度、初回講義時に実施。

ⁱⁱⁱ 「保育士養成機関における「施設実習」の現状と課題（Ⅱ）—実習事後指導を通じた「自己評価」と「気づき」に関する分析から—」、石山貴章、安部孝、田中誠、九州ルーテル学院大学紀要、40、pp.59-72、2010。

【参考文献】

「施設入所している高齢者および障がい者の衣生活における問題点：施設実習学生の視点からの把握」、小松恵美子、藤女子大学人間生活学研究、17、pp.19-26、2010。

「ある児童養護施設職員の語りのKJ法による分析：テキストの重層化プロセスからとらえる実践へのまなざし」、高橋菜穂子、京都大学大学院教育学研究科紀要、57、pp.393-405、2011。

「保育士のための福祉施設実習ハンドブック」、小野澤昇、田中利則、ミネルヴァ書房、2011。

「保育士養成施設における施設実習の現状と課題」、粕谷亘正、東京立正短期大学紀要、38、pp.1-14、2010。

「保育士養成機関における「施設実習」の現状と課題（Ⅰ）：短期大学「施設実習」に向けた事前指導を通して」石山貴章、安部孝、九州ルーテル学院大学紀要、38、pp.157-170、2008。